

## 序文

本年の日本造血細胞移植学会全国調査報告書を皆様の手にお届けすることができましたことを非常にうれしく思います。膨大なデータ量を解析し纏めて下さいました日本造血細胞移植データセンターの皆様に深謝いたします。そして、これは我々学会員が一例一例症例を積み重ね、多忙な臨床のなか登録をしてきた正にその賜物です。年々厚くなっていくこの本は我々の歩んできた誇るべき歴史であり、将来への道標となるものであります。

近年の移植数の動向を概観しますと、この数年移植数の増加は鈍化してきています。これは本邦の人口動態が減少に転じたことが一つの要因であるものと思われれます。更に人口構成の高齢化により従来への適応であった若年層に対する移植は減少し、高齢者に対する移植が急増していることに気づきます。今右肩上がりの成長期は過ぎ、本邦の造血細胞移植も成熟期に入ろうとしています。今後我々は社会の変化に対応した移植医療を作り上げ、移植そして移植登録の質を更に高める努力が求められます。

移植ソースの変化としては、2005年以降長らく同種移植の中で最多であった非血縁者間骨髄に代わり同種臍帯血がわずかに凌駕しました。これは臍帯血の利便性が評価されより多くの臨床現場で選択がなされた結果であります。本邦の臍帯血移植数は全世界で最多であり、我々の誇るべき財産であります。長年臍帯血移植の普及に努力されてきた先生方、関係者の方々に深い敬意を表します。一方血縁者間移植では末梢血幹細胞移植が増加しています。これは実験的治療と考えられてきたハプロ移植が、一般的な移植の一つと考えられるまで症例数が増加した結果と推察されます。更に近年開始された非血縁者間末梢血幹細胞移植は評価が定まるまでまだ時間を要すると思われれますが、徐々にではありますその症例数は増加しており今後の展開が期待されます。このように移植ソースは現在過渡期を迎えています。我々はこの変化を柔軟にとらえ、様々な移植に対応できる体制を臨床現場そして学会においても整備していく必要があります。

そして我々はこの貴重なデータを基に、今後の造血幹細胞移植の成績向上を図っていく責務があります。現在多くのワーキンググループが活動し、研究成果が学会、論文で活発に発表されています。この活動を更に発展させ本邦の成績を胸を張って世界に発信して欲しいと願います。

最後に、移植成績は決して単なる統計数字ではありません。これは一例一例の患者さん、ドナーと家族、移植医、その移植に携わった多くの医療スタッフの努力の積み重ねが40年の歳月をかけてなした結晶であることを、本書を使用される会員の皆様、更には移植成績を解析される方々に本書を手にとる度に是非思い起こしていただきたいと願うものです。